

33
2023.5

薬友会報

千葉大学薬友会



2018年
3月31日



2020年
6月9日



2022年
10月7日



2023年
3月4日

Ⅱ期棟403の窓から 風景の変遷

薬友会長・研究院長ご挨拶	2
退任のご挨拶	3
新任のご挨拶	3
医学薬学府学府長ご挨拶	4
薬友会役員紹介	4
薬学部この一年	5
会員便り	7
研究室便り	10
クラス通信	13
サークル紹介	15
学部だより	16
教員の人事異動	16

第108回 薬剤師国家試験合格状況	16
2022年度 卒業生・修了生の進路	16
2023年度 薬学部入学者の状況	17
2023年度 大学院医学薬学府入学者の状況 (4月入学者)	17
2022年の受賞記録	17
薬友会より	19
第31回千葉大学大学院薬学研究院 薬友会生涯教育セミナー 宮木高明記念講演会開催のお知らせ	20
薬剤師卒後教育研究講座開催のお知らせ	20



薬友会員の皆様には益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。令和2年から続くコロナ禍での対応ですが、令和5年度の感染症法上の位置づけ変更を踏まえ、通常モードでの対応を模索しています。教育に関しては、令和4年6月以降、講義は原則対面で実施しています。収容定員の制限も完全になくなるため、令和5年4月からは従来通りの講義室と実習室を使用して授業を行っています。研究活動に関しては、研究室毎に感染対策を施した上で実施しています。研究成果の発表の場である学会はこれまでオンライン開催が中心でしたが、最近

は対面開催が増えてきました。対面での発表や参加者との交流は、学生や教員にとりとても重要な機会であることを、ここ数年のオンライン対応で感じております。会議等も含め、対面とオンラインをうまく使い分けた対応が求められます。また、海外との対面交流も徐々に増加しております。学生の留学プログラムも対面中心に移行できるよう、プログラム開発に対応していきます。一方、懇親会やコンパを含む人的交流はまだ制限がある状況ですが、令和5年度は今よりも状況が緩和されることが期待されます。

次に最近の主な動きを紹介します。研究に関しては、大学に国際高等研究基幹が設置され、若手中心の研究プロジェクトの推進や若手人材の育成が行われています。薬学からは原田真至先生がテニュアトラック准教授として採用されました。また、クロスアポイントメント教員として理化学研究所の橋本卓也先生が薬学で活動を始めます。薬学研究院の教員も科研費や競争的資金の獲得に積極的に取り組み、JSTやAMEDなど大型資金の獲得に至っています。人事に関しては、令和5年3月末に活性構造化学研究室の石橋正己教授が退職され、4月には山次健三先生が薬品合成化学研究室教授として着任されました。亥鼻地区の施設整備に関しては、医薬系総合研究棟2期棟の傍に災害治療学研究所施設が竣工しました。道路拡張整備も完了し、キャンパスへの行き来は便利になりました。薬友会に関しては、令和4年度は対面・オンライン併用による総会と生涯教育セミナーを実施しました。本年度は対面での実施を予定しています。お時間が許すようでしたら亥鼻キャンパスの見学も含め、足をお運びいただけますと幸いです。

令和4年はロシアのウクライナ進行に始まり、その影響は今でも色濃く残っています。とくに光熱費急騰による部局予算に対する影響は甚大です。電気・ガス使用量の削減に取り組んでおりますが、それでも対応が追いつかない状況です。また、実験に使用する液体ヘリウムガスの出荷制限・価格高騰による影響も研究に支障をきたし始めています。この状況が継続することで教育や研究レベルの低下に陥らないよう対策を進めます。教職員一同、今後もニューノーマルでの活動を目指し尽力して参ります。薬友会員の皆様におかれましても、これまで以上のご支援とご協力を宜しくお願い申し上げます。

退任のご挨拶

石橋 正己



平成9年11月に千葉大学薬学部に着任して以来、25年以上の長きにわたり、多くの皆様のご指導とご支援を賜ってまいりましたが、本年3月末をもちまして定年退職の時を迎えました。

着任時、自分の学生時代にお名前をよくお聞きしていた山崎幹夫先生のお部屋である活性構造化学研究室を引き継がせていただき、助教授の藤本治宏先生と助手の奥山恵美先生と3人でのスタートとなりました。生物活性天然物の探索を基盤とした天然物化学研究をすすめるという点では変わりなく、「活性構造化学」という研究室名を継承させていただきました。

その後、奥山先生は2001年に助教授昇任を経て2004年に城西国際大学薬学部の教授として、藤本先生は2005年に帝京平成大学薬学部の教授としてご栄転されました。研究室は、当初西千葉キャンパス薬学部4号館1、2階にありましたが、2004年に同じ西千葉の薬学部2号館4階へ移動し、2011年秋に亥鼻キャンパス医薬学総合研究棟Ⅱの4階へ引越しました。

研究テーマは、一貫して生物活性天然物の探索研究を基本として、独自の天然物抽出エキスライブラリーを保有し、種々の疾患や生命現象に関わるシグナル分子を標的としたスクリーニング研究を行いました。研究材料としては、変形菌、放線菌、タイ・バングラデシュ産植物などを用い、TRAIL耐性克服作用やWntシグナル阻害作用等、多岐にわたる生物活性成分や、テルペノイド・アルカロイド等のユニークな化学構造をもつ新規天然物を見出しました。2006年荒井緑博士が研究室に加わり、スクリーニング研究の進展とともに、活性天然物の全合成・ケミカルライブラリー合成、生物活性低分子の活性機構解明・天然物基盤ケミカルバイオロジー研究等、赴任当初からやりたいと思っていた包括的な天然物化学研究を進めることができました。2020年荒井准教授が慶應義塾大学理工学部教授として転出された後は、免疫微生物学研究室から高屋明子准教授を迎え、新しい概念に基づいた感染症治療薬のスクリーニング、病原細菌感染制御機構研究からの新しい標的因子の探索等に関する研究が実施されています。

最後になりましたが、おかげさまで、在職中は、大きな怪我や病気をすることもなく、毎日がとても充実した教育研究生活を送ることができました。長い間お世話になり、どうもありがとうございました。千葉大学薬学部・薬学研究院の教職員・学生の皆様のご健勝とご活躍、そして益々のご発展を心より祈念申し上げ、私のご挨拶とさせていただきます。

新任のご挨拶

山次 健三



2023年4月1日付で、薬品合成化学研究室の教授を拝命致しました。我が国で最も歴史と伝統ある薬学部のひとつである、千葉大学大学院薬学研究院・薬学部で教育・研究を行う機会を頂戴しましたことに身が引き締まるとともに、意気込んでおります。薬友会報の誌面をお借りして、ご挨拶を申し上げます。

私は2005年3月に東京大学薬学部を卒業後、同4月東京大学大学院薬学系研究科に入学し、柴崎正勝先生、金井求先生のご指導のもと、2010年に学位を取得致しました。この間、不斉触媒反応の開発研究とそれを用いた医薬品の効率的合成法の開発研究に取り組みました。私は学部4年生の研究室配属時から生物学研究に興味がありましたが、生物の言葉を化学で理解できるようになってから取り組みたいと考え、柴崎正勝先生の門を叩いたのを記憶しています。柴崎正勝先生のご退官とご異動に伴い、2010年4月から1年間、微生物化学研究所で博士研究員を務めたのち、2011年4月からは米国ウィスコンシン州立大学マディソン校化学科にて、Laura L. Kiessling教授のもと、博士研究員として1年半、有機合成化学を基盤とした糖鎖生物学研究に従事しました。研究室配属時の目論見通り、生物学研究に少しだけ舵を切ったわけです。その後、2012年10月にJST-ERATO金井触媒分子生命プロジェクトのグループリーダーとして東京大学大学院薬学系研究科に戻ってからは、2015年より助教を務め、細胞内でタンパク質の化学修飾反応を促進する化学触媒の開発と細胞エピゲノムへの合成的介入研究に一貫して取り組んで参りました。博士研究員時に取り組んだ、試験管内で合成した有機分子を基盤に行う糖鎖生物学研究から、さらに生物学により一歩踏み込んで、生物の持つ化学ネットワークに細胞の中で行う化学反応によって介入することを目指しました。

私の取り組んだ(齧った)生物学研究は、あくまで合成化学を基盤とした、本流の生物学研究とは異なると思いますが、まわり回って今考えることは、やっぱり化学が好き、ということです。今後は、タンパク質などの生体高分子を、合成低分子のように自由自在に化学変換出来る新しい反応性の開拓と、それを活かした医薬化学研究に取り組んでいきます。私が研究室配属時に抱いた「化学と生物、サイエンスはひとつ」という気持ちは今でも変わりません。有機化学を基盤としながら広くサイエンスを見渡せる人材の育成を行なって参りたいと考えています。浅学の身ではございますが、どうぞ皆様のご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

医学薬学府・学府長挨拶

小椋 康光



本年度より、図らずも千葉大学大学院医学薬学府長に選出され、2年の任期でその任にあたることになりました。どうぞよろしくお願い申し上げます。

本学医学薬学府は、2001年に全国初の医学・薬学融合型大学院教育組織として設置されました。医学薬学府が創設された2001年の薬友会報（Vol. 11）に掲載されている初代副学府長の鈴木和夫先生のご挨拶には、薬学教育6年制導入や国立大学法人化を控えた大きな荒波の中での船出となるものの、新たな組織における研究と教育の充実に期待を寄せられておられました。それから20年以上が経ち、予想された荒波以外にも自然災害やコロナ禍など、社会全体を大きく揺るがす事態も発生いたしました。本学府は着実に歩みを進めており、現在では文部科学省卓越大学院プログラム「革新医療創生CHIBA卓越大学院」や国立研究開発法人科学技術振興機構の次世代研究者挑戦的研究プログラム「全方位イノベーション創発博士人材養成プロジェクト」といったプログラムを推進し、優秀な大学院生の支援を充実させております。また昨年8月には5つ目のダブルディグリー協定校として、チュラボン大学院大学との調印を済ませ、大学院生の国際的な活躍の場の拡充も行っております。

令和4年度は、総合薬品科学専攻（修士課程）が44名（9月修了5名含む）、先端創薬科学専攻（3年制博士課程）が14名（同4名）及び先端医学薬学専攻（4年制博士課程）が9名（同1名）の修了生を輩出いたしました。一方、修士課程は48名（10月入学3名含む）、3年制博士課程は12名（同2名）及び4年制博士課程は3名の入学者を受け入れました。2023年2月に株式会社ベネッセホールディングスの発表した「現役中高生の将来の夢や職業に関するアンケート調査」によると、男女とも第1位は「教師・教員・大学教授」という結果でした。まさに未来を担う人材の夢と希望を叶える教育の場として、大学院が求められていると思われまふ。現在の入学者のみならず未来の入学者を含めた学修者の期待、そして社会からの負託に十分応えられる大学院として発展していくことに微力ながら尽力する所存です。薬友会会員の皆様には、大学院生支援や国際交流活動の拡充といった点にご理解を賜り、引き続きご支援とご協力をお願い申し上げます。

薬友会役員紹介

令和4年の薬友会定期総会で副会長の交代が承認されました。内田武客員教授、上野光一名誉教授が留任、新たに、山崎真巳教授が着任されました。



内田 武 先生

略歴

S56千葉大薬卒、S61千葉大院薬博修了（薬学博士）、アステラス（山之内）製薬を経てH26より千葉大学（現）学術研究・イノベーション推進機構（IMO）特任教授・客員教授、加えてH27からは、（一社）国際再生医療普及協会 代表理事、デンタルサポート（株）、ヘルスメッド（株）の代表取締役社長・会長を経て現在 顧問。



上野 光一 先生

略歴

昭和47年千葉大学卒業 昭和49年同大学院修了後帝人株式会社入社。昭和54年同退社。千葉大学薬学部教務職員採用。その後助手、講師、助教授を経て、平成13年教授。平成26年定年退職。現在千葉大学名誉教授・千葉大学予防医学センター客員教授



山崎 真巳 先生

略歴

1986年千葉大薬卒業、1990-92年JSPS特別研究員、1991年千葉大院薬博士課程修了、1992年千葉大薬教務職員、助手、講師、助教授、准教授を経て、2021年より千葉大薬教授。千葉大学植物分子科学研究センター長。

薬学部の一年

プレスリリースされた薬学部の研究

2022年の千葉大学からプレスリリースされた薬学部の研究について紹介いたします。これに限らず各研究室の研究成果について積極的に発信していますので、研究室HPをチェックしてみてください。

- 2022年 1月12日 「バーチャルシミュレーション主導による天然成分の人工合成に世界で初めて成功」薬化学研究室 中島誠也 根本哲宏
- 2022年 4月25日 「がんの新しい治療薬開発に光明～がんの進行を早める新たな鍵分子の発見～」分子心血管薬理学研究室 山口憲孝 高野博之
- 2022年 7月27日 「青色光エネルギーを効率的に受け渡す配位子開発に成功－創薬や金属の新しい反応性の発見に前進－」薬化学研究室 中島誠也 根本哲宏
- 2022年 7月28日 「医薬品有効成分の新しい結晶化経路を発見！～医薬品開発における結晶化制御への新しい知見～」製剤工学研究室 東顕二郎 植田圭祐 森部久仁一
- 2022年 9月2日 「認知症の新たなメカニズム解明へ！～加齢に伴い認知症の発症リスクを上昇させる因子の発見～」生化学研究室 殿城亜矢子 伊藤素行
- 2022年12月5日 「金属触媒・酵素触媒の力で生物活性分子群の骨格を不斉合成－新たな手法の開発により創薬シーズ創出へ前進－」薬化学研究室 原田慎吾 根本哲宏
- 2022年12月20日 「生薬「甘草」の染色体スケールのゲノム解読に成功－薬効成分を作る遺伝子クラスターを解明－」遺伝子資源応用研究室 山崎真巳
- 2022年12月21日 「実験とAIの融合！ホウ素触媒反応の新展開と新理解－環境に配慮した金属代替法の発展に貢献－」薬化学研究室 原田慎吾 根本哲宏

千葉大学国際高等研究基幹研究支援プログラム

「免疫関連疾患治療効果を示す抗糖鎖モノクローナル抗体の開発」

研究代表者：川島 博人

糖鎖は、細胞外の環境変化や細胞の状態変化に応じてダイナミックに構造を変化させ、細胞間認識や細胞接着、細胞間シグナル伝達等の多様な機能を発揮することから、病態バイオマーカーとして有用であるとともに、新規創薬標的として有望です。これまでに我々は、糖鎖合成酵素欠損マウスを用いた効率の良い抗糖鎖抗体作製法を開発し、同方法論を用いて、リンパ球ホーミングと免疫応答を顕著に抑制する活性を持つ新規抗糖鎖抗体を樹立しました。さらに同抗体の遺伝子配列情報をもとにして、可変部フレームワーク部分の配列をヒト抗体の配列に置き換えたヒト化抗糖鎖抗体の樹立に成功しています。本研究では、各種の免疫関連疾患モデルを用いて、同抗体の疾患治療効果とその作用機序を解明するとともに、同抗体の物性、体内動態、安全性、免疫原性等の多面的評価を行い、糖鎖を標的とする新規抗体医薬開発の基盤を確立することを目指しています。本研究は、千葉大学国際高等研究基幹（IAAR）研究支援プログラムおよび日本医療研究開発機構（AMED）橋渡し研究preFの支援により実施しています。

大型研究プロジェクトの紹介

AMED-PRIME「加齢によるプロテオスタシス破綻に伴う記憶低下機構の解明」

研究代表者：殿城亜矢子

高齢化社会の進行に伴い高齢者の5人に1人が発症する認知症への対策は、極めて重要な課題です。認知症でみられる加齢に伴う記憶低下は、異常タンパク質が神経細胞内に蓄積し、脳機能を支える神経回路を破綻させることで生じます。細胞内にはタンパク質を分解するユビキチンプロテアソームシステムやオートファジーなどプロテオスタシス機構が備わっていますが、加齢によりそれらの機能が低下します。本研究では、私たちのグループで確立させてきた遺伝学的・行動学的解析を通して、加齢によるプロテオスタシス機構の低下が神経細胞の機能や神経回路を破綻して記憶能を低下させる機構の解明を目指します。

チュラポーン研究所・大学院大学との交流

チュラポーン研究所（Chulabhorn Research Institute, CRI）は、タイ王国のトップ研究機関の一つであり、チュラポーン大学院大学（Chulabhorn Graduate Institute, CGI）が併設されている。千葉大学では、2013年にチュラポーン大学院大学と大学間協定を結び、2019年にはチュラポーン研究所とも大学間協定を締結した。本交流協定のもと、薬学研究院では、教員レベル、学生レベルの双方で相互交流を続けてきた実績があり、薬学研究院の重要な国際交流先の一つとなっている。2020年1月末には、2020年4月のENGINEプログラム始動を見越して、薬学研究院の教員5名、大学院生4名がチュラポーン大学院大学を訪問し、ENGINEプログラムに関しての話し合いと、化学分野でのシンポジウムを開催したが、直後のCOVID-19の世界的な広がりに伴い対面交流は中断していた。2022年度に入り国際的な往来が回復し始めたことを契機に、本交流に進展があった。まず、2022年8月には、チュラポーン大学院大学側からの依頼を踏まえ、大学院医学薬学府とチュラポーン大学院大学との間でDual Degree協定を締結し、薬学研究院より3名の教員がバンコクを訪問して署名セレモニーを行った。2022年10月からは学生の海外渡航条件が緩和されたことから、4名の大学院生がチュラポーン大学院大学にてENGINEプログラムによる研究を行った。2022年12月には、タイ王国チュラポーン王女殿下が千葉大学に来学され、千葉大学とチュラポーン研究所・大学院大学での3者協定を新たに締結した。2023年2月6、7日には、チュラポーン研究所・大学院大学より6名の教員、2名の大学院生をお招きして、合同シンポジウムを千葉大学にて開催した。化学系分野にてThe 3rd CRI-CGI-Chiba Symposium in Chemistryを開催するとともに、先方よりいらした生物系研究者と薬学研究院の研究者とでSatellite Workshopも同時開催し、生物系分野にも交流を拡大した。これらの交流活動に対し、2023年3月9日には在東京タイ大使館より夕食会の招待を頂き、薬学研究院の教員も3名出席した。COVID-19の収束が見えつつある2023年度以降は、さらに活発な国際交流が期待される。



薬剤師教育における新たな取り組み－実務実習後達成度試験－

薬学部6年制教育では、5年次に病院と薬局での実務実習を行っています。従来、実務実習後に行っていた成果報告会では学生の意識の変化はわかるものの、知識・技能・態度について十分な評価はできないことから、実習の達成度を総合的に評価することを目的として、令和4年度には実務実習が終了した学生を対象に臨床業務に関する試験（達成度試験）を行いました。学生には、試験場（薬学部内模擬実習薬局）は薬局の店頭であるという情報のみを与え、来局者への一連の対応を適切に行うようにという課題を与えました。こちらが期待した学生の行動は、処方箋を持参した模擬来局者からの初回情報収集、処方鑑査、錠剤・散剤・外用剤の調剤、服薬指導を行うというのですが、実際に何をどのように行うかは学生に一任しました。実務実習前はおっかなびっくり調剤や服薬指導を行っていた学生が、今回の試験では薬の本を参照しながらも処方鑑査を行い、堂々と服薬指導を行ったり、患者から収集した情報を元に患者の立場で考え疑義照会を行った学生もあり、大学内のみの実習では得られない貴重な経験をして大きく成長していることを目の当たりにして非常に嬉しく頼しく感じました。

会 員 便 り

高橋 宏昌（アッヴィ合同会社・メディカルサイエンスリエゾン(MSL)）

私は薬効薬理学研究室にて村山教授、中村助教（現教授）よりご指導いただき、2017年に修士課程を修了しました。新卒からゼリア新薬工業株式会社に4年間創薬研究に従事した後、現在はアッヴィ合同会社でメディカルサイエンスリエゾン（MSL）として業務に励んでいます。

先日、縁があって、仕事の関係で千葉大に訪れる機会があり、薬効薬理学研究室の中村先生にお会いしました。研究室にいた頃と変わらず、2研で中村教授がご指導されているのを見て、懐かしさを覚えました。大学院時代はなかなか研究がうまくいかず、基礎研究の難しさを感じましたが、自身のテーマである「セラミドキナーゼのリン酸化」を初めて捉えることに成功した時の喜びは今でも覚えています。また、研究室では研究のことだけではなく、スライドの作成やプレゼンの仕方など手厚くご指導いただき、現在の業務でも私の基盤となっていることを日々実感しています。この場をお借りして、御礼申し上げます。

私は約7年間、研究をしておりましたが、臨床に近い現場で薬剤や医療の発展に貢献する仕事をしたいと思い、一昨年に現職のMSLに転職しました。新しい職種・環境への挑戦となり、最初は戸惑うことも多くありましたが、研究と通ずる部分もあり、大きなやりがいも感じています。これからの人生も変化を楽しみながら、精進していきたいと思っています。

（平成29年修士課程修了）

吉岡 英樹（独立行政法人医薬品医療機器総合機構）



私は臨床薬理学・樋坂先生のご指導の下、モデリング&シミュレーションや機械学習を用いた臨床試験データの解析をテーマとして2020年9月に博士号を取得し、現在は客員研究員として同研究室での研究を続けながら、PMDAという組織で医薬品の承認審査を行なっています。思えば2012年に薬学部へ入学して1年目、ある授業の単位を（当時の先生によると過去初めて）落としてしまうかもしれないという危機的状況の中、救済措置として課されたレポートの内容が「PMDAについて調べよ」というものでした。当時はPMDAなど存在すら知らず、“こんな堅苦しいところ絶対に行きたくない”とまで思っていました。けれど10年後、そんなPMDAでは現在、臨床試験データの活用など科学面の充実が今後の課題の一つとして重要視されていて、研究室で培った知識や技術がまさに活かされようとしています。考えてみれば学部3年の秋、元々有機系の研究室を志望していた私が、当時人気もなく余りものだった臨床薬理学研究室を選んだのも、（お察しの通り）GPAが低く、いわゆる“札掛け”に敗れたからでした。その時々では「なんでこんな不幸な思いしなきゃいけないんだ」と思っていました（←自分が悪い）、今考えれば無駄なことは一つもなく、お世話になった方々には感謝しかありません。こんな私ですので、PMDAにいらした際には、是非お気軽にお声掛けください。

（令和2年博士課程修了）

坂本 康二（アステラス製薬株式会社 研究本部 バイオロジクス研究室）



私は修士課程の2年間、免疫微生物学研究室（旧微生物薬品化学研究室）にてご指導いただき、卒業後の現在は製薬企業で新薬の研究に携わっています。研究室では川島博人教授より丁寧かつ熱心なご指導を頂き、免疫学の「め」の字も知らなかった私にとって川島先生のもとで学んだ研究の考え方が現在の私の研究者としての基盤となっているのだと実感しています。また他学部から来た私に対しても親切に接して下さった先輩・同期・後輩には大変感謝しております。

現在は生物系研究職として、周りの方々に支えられながら研究をしています。社内には千葉大学薬学部を卒業された先輩方がいらっしゃり、研究分野だけではなく臨床など垣根を超えた部署の方も多く、同大学としての「つながり」を実感していると同時に、そのつながりこそが新薬を生み出すのに必要不可欠なものであると痛感しています。今後とも川島先生にご教授頂いた研究への熱い気持ちや考え方を活かし、新薬創出に取り組んでいきます。

（平成31年修士課程修了）

小野沢 忠吉（住友化学・材料系開発 合成業務）



高山廣光教授のご指導のもと、博士課程修了までの6年間を生体機能性分子研究室（現中分子化学研究室）にて、植物天然物探索および新規化合物の全合成研究をしていました。当研究室にて成分探索から全合成、一部リード化合物スクリーニングまで経験できたのは今でも誇りに思っております。

さて、現在は住友化学にて材料系開発の合成業務を担当しております。化学メーカーに入社する未来は大学院にいたときは想像もしていませんでしたが、入社して様々な開発テーマに触れ、「こんなところにまで科学があったのか」という驚きと科学の興味深さを改めて知るばかりです。その一方で、大学院で使用していた溶媒や反応をコスト面や安全面から悉く使えないという制限がある中、歴史の長い研究分野で新規開発品を生み出すという難題に頭を抱えながらも、日々精進しております。

現在、社会人4年目を迎えようとしている中で、時間と経済的なゆとりがようやく出てきたためチェロ演奏を習い始めました。実のところ、幼少の頃よりチェロに限らず楽器演奏をやりたいとずっと思っていたため、また一つ自分の夢をかなえようとしているところです。チェロを始めてから1年半になりますがその難しさと楽しさにハマりしており、この1月よりいよいよ弦楽四重奏のクラスにも所属してしまいました。引き続き、仕事に趣味に悔いのないように邁進したいと思います。

（令和2年博士課程修了）

大房 俊行（アステラス製薬株式会社 データサイエンス業務担当）



2002年に薬学部に入學し、2005年から6年間、薬品合成化学研究室の西田篤司先生のもとでお世話になりました。今振り返ると有機化学の知識や技術だけではなく、学び続けることへの姿勢を教えて頂けたと感じています。

博士課程修了後はメディシナルケミストとしてエーザイ株式会社に入社しました。新薬候補化合物の探索研究を続ける中で「科学者がより良い薬剤をより早く作れる環境を実現したい」と感じ、ケミストとして研究業務に携わる傍らで新規技術導入や業務の効率化を検討するチームを立ち上げ、組織横断的な活動を行ってきました。その後、思いが高じて独学でデータサイエンスの基礎を学び、昨年の6月にデータサイエンティストとしてアステラス製薬株式会社に転職しました。現在はケミストのバックグラウンドを活かしながら研究・生産現場の効率化や自動化を進める仕事に従事しています。

研究者の基礎とも言える、新しい知識への好奇心や、多くの人と議論する楽しさは、千葉大での研究室生活の中で構築させてもらったと感じております。新規技術の急速な発達、研究を取り巻く環境や国内外の情勢変化など、考えなければならない問題はたくさんありますが、自らの力で新たな道を切り開くチャンスも広がっているように感じます。千葉大学におかれましてはこれからもサイエンスを楽しめる研究者の育成を頑張ってもらえるようお願いしております。

（平成23年博士課程修了）

中山 弥生（旧姓 吉富）（日本ベーリンガーインゲルハイム㈱ 医薬開発本部）



2001年に千葉大学に入學し、学部4年生から博士課程3年までの6年間、薬化学研究室にて濱田先生、牧野先生、根本先生にご指導いただきました。研究室生活では多くのことを学び、その後の人生の礎を築くことができました。博士課程修了後、製薬企業に研究職として就職し、創薬研究に7年間従事しました。現在は製薬会社の医薬開発本部にてメディカルアドバイザーとして育薬に従事しております。

学部3年生の頃の実験に魅了され、研究室で実験に励むうちにずっと大学で研究をしたいという思いを強くしました。しかし、博士課程2年時に参加したインターンシップで、企業の研究者の方々の創薬研究への思いに触れて、患者さんの健康に貢献できる創薬研究に従事したいと考えが変わりました。企業では多くのプロジェクトに関わったものの、なかなかうまくゆかず、徒労感を感じる日々でした。そんな中、海外赴任する機会をいただき、様々なことを経験し、考え方、文化、社会などの違いを知り、視野が広がりました。そして、創薬研究以外で患者の健康に貢献する道があるのではないかと考えるようになりました。帰国後、縁あって現在の会社に転職し、医薬品の価値最大化業務に励み、大変ながらも充実した日々を過ごしております。

今後多くの分岐点に立ち、多くの困難に遭遇することでしょう。そんな時には研究室生活で培った自ら考え自ら動く力が大いに役立つものと思っています。

（平成22年博士課程修了）

峰岸 元気（明治薬科大学薬剤学研究室）



2016年春から秋田英万教授（現・東北大学）の薬物学研究室に所属し、2022年4年制博士課程修了までご指導いただきました。現在は、当時の指導教員・小林カオル教授、また、薬物学研究室博士課程を修了された先輩・宮嶋篤志講師と共に、明治薬科大学薬剤学研究室にて薬物学研究室の雰囲気を引き継ぎながら研究させていただいています。

薬物学研究室では、現在も引き続き小林カオル先生と共に進めているヒト遺伝子導入動物を用いた薬物代謝酵素や薬物トランスポーターの研究だけでなく、秋田先生や田中浩揮先生の研究である脂質ナノ粒子を用いた核酸製剤の作製・評価法であったり、降幡知己先生（現・東京薬科大学）の研究である中枢移行を評価する脳細胞共培養モデル確立であったりと、最先端の薬物動態研究に幅広く触れ合うことができました。ヘテロな立場から様々な意見が飛び交う環境に身を置けたことは、非常に刺激的でありがたい経験であったと、研究室から離れてみて強く実感しています。

初めて触れる教育と研究の両立はなかなか大変で、重ねた年齢の割にまだまだ未熟であることを思い知らされる日々です。お世話になった薬学界に少しでも還元できるよう、これからも精進して参ります。千葉薬の同期や先生方には、これからもご助言・ご指導いただけると幸いです。（令和4年博士課程修了）

北口 隆（日清食品ホールディングス株式会社グローバル食品安全研究所）



2002年に薬学部へ入学し、衛生化学研究室にて鈴木和夫先生、小椋康光先生、鈴木紀行先生のご指導の下、修士課程までお世話になりました。卒業後は某製薬会社の研究所で10年近く創薬段階の安全性評価業務に携わったのち、薬事室へ異動、その後会社を移り、現在は食品安全分野の試験法に関する研究に携わっています。元々は実家から自転車通学圏内の大学で薬剤師免許を取り手に職を、という安易な気持ちで入学しましたが、気づけば研究の面白さにどっぷり浸かってしまい、中々抜け出せずにいます。大学時代の志の高い仲間の存在や、研究室での先生方や先輩方のご指導が大きかったのかなと思います。薬学で学んだ広範な知識は食品分野でも大いに役立っており、他学部出身者が多い中で自身の大きな強みとなっています。

現在も亥鼻キャンパスには共同研究関係や薬学生への講義（「社会で活躍する薬学研究者」にて自身のキャリア紹介）で訪問する機会があり、母校への恩返しを少しでもできればと思っています。また、在学当時には無かった医薬系総合研究棟の2号棟やおしゃれなカフェなどキャンパスの変化を肌で感じており、自身も変化を恐れず、これからもチャレンジを続けていこうと思います。（平成20年修士課程修了）

小野 貴裕（株式会社マイクロン モニタリング事業部（2023年4月現在））



2013年2月から2016年3月まで分子画像薬品学研究室でお世話になりました。気が付いたら早くも卒業7年を迎えています。などと自己紹介を書いたは良いものの、さてどう続けたものかと頭を抱えてはや20分…。素人文章ですので、暇つぶし程度にお目汚しいただければ幸いです。さて、余談はこの程度にいたしまして。卒業以来CRO（開発業務受託機関）にて臨床開発をはじめとして医療機器プログラムの開発やチームマネジメントを経験し、研究室時代にやっていたことからずいぶん遠いところに来たとしみじみ感じるところです。みなさまはいかがでしょう？入社しばらくは不良社員を気取ってのんびりと仕事をしていましたが、マネジメントを始め部下を持つてからは、日々の仕事に追われつつも「どうしたらより効率的な体制を作れるのか」「魅力的な提案ができるチームになるためには何が必要か」などプラスアルファを考えるようになりました。立場が変われば人も変わるものですね。

新型コロナウイルス感染症の流行があり、働き方や生活様式にも大きな変化があったかと思います。これからの皆さんの変化を経験していくことですが、もうしばらくして感染症が落ち着いたのちに、変わらぬ旧交を温める機会が来ることを強く願っております。（平成28年修士課程修了）

研究室便り

他の研究室は次号に掲載します

遺伝子創薬学（かずさDNA研究所）

遺伝子創薬研究室は、かずさDNA研究所との連携講座です。1) 中山らは、新規部位特異的組み換えシステムの開発を通してゲノム中の特定の遺伝子や領域を人工的に変化させるゲノム改変技術開発及び疾患モデルマウスの作製支援、2) 磯部らは、新型シーケンサーによる薬用植物の全ゲノム解析と遺伝子予測、ならびに薬用植物の分子育種法の開発に関する研究、3) 大関らは、新型シーケンサーを用いてヒト染色体の高次構造や動作原理を明らかにし、創薬に役立てるための研究開発を行っています。我々は、生命のゲノム情報を基に、DNA塩基配列決定技術や質量分析技術を駆使し、新しい創薬への道筋を生み出せたらと願っております。



医療薬学

医療薬学研究室には石井伊都子教授、鈴木貴明准教授、内田雅士助教の教員3名と、学部学生4名、修士課程学生1名、留学生を含む博士課程学生6名が在籍しております。附属病院薬剤部との繋がりが強い利点を生かし、附属病院の診療科と共同で、形成外科領域での外用剤治療や抗ウイルス薬の体内動態と効果および副作用に関する臨床研究などを行っています。また動脈硬化に関連した基礎研究も行っております。テーマが多岐にわたるため研究手法も大きく異なっており、学生は互いのテーマから幅広い研究手法に触れることができます。医療や薬物療法に役立つ情報を創出できるよう、今後も研究室と薬剤部で協力して取り組んでいきます。



環境リスク（国立環境研究所）

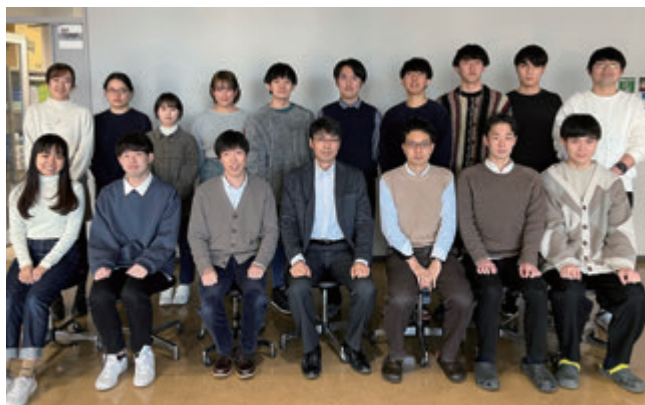
環境リスク研究室は、2001年から国立環境研究所（つくば市）に設置されている連携講座です。現在は中島大介教授、小林弥生教授及び鈴木武博准教授（いずれも環境リスク・健康研究領域）の3名で構成されています。主な研究テーマは、有機汚染物質の網羅分析法の開発、毒性測定による化学物質汚染の包括的把握に関する研究、分析毒性学的手法を用いた半金属元素の代謝機構の解明、化学物質による健康影響評価のためのヒューマンバイオモニタリング手法の開発、化学物質の曝露評価と生体影響及び化学物質による次世代影響メカニズムに関する研究です。当室で学ぶ若い力に期待しています。見学は随時、歓迎します。



生物薬剤学

生物薬剤学研究室では、令和4年度は、教員3名（伊藤晃成教授、青木重樹講師、竹村晃典助教）、大学院生8名（博士課程4名、修士課程4名）、学部生12名の体制で、医薬品副作用の分子メカニズム解明やその回避に向けた研究に取り組みました。今年3月には、青木講師が「薬物副作用の個人差の背景に潜むメカニズムの解明」の題で日本薬学会奨励賞を受賞しました。また、青木講師は昨年数ヶ月の間カナダへ渡り、国際的なつながりも活発になろうとしています。今春3月には修了生・卒業生4名が企業などの新天地へと羽ば

たいていきました。このポストコロナ時代に研究活動をより活性化させ、医薬品の安全な使用を目指して邁進しています。



製剤工学

研究室のホームページをリニューアルしたので、是非ご覧ください！以下、昨年・本年度の2年間のTopicsです。森部教授が日本薬剤学会会長（2年間）を務められました。植田助教が日本薬剤学会奨励賞を受賞しました。卒業生13名は、2名が大学教員（インドネシア、中国）、11名が製薬会社研究職として活躍しています。また、海外雑誌に23報の論文を発表、また7名の学生が諸学会で優秀発表賞を受賞しました。3年生配属が10月となり、また1学年の定員も6名に増え、中国・インド・インドネシア・ドイツからの留学生も在籍し、益々大所帯となっています。お近くにお越しの際は、是非研究室まで遊びに来てください！

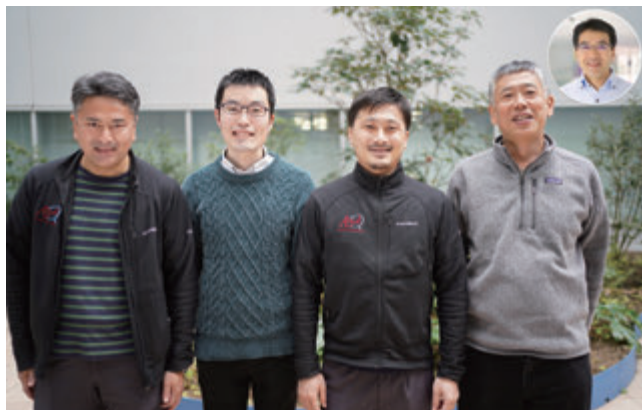


創薬物性（武田薬品工業）

本研究室は、2019年4月に千葉大学大学院と武田薬品工業株式会社との連携講座として、神奈川県藤沢市の湘南ヘルスイノベーションパーク（iPark）内に創設された。主たる研究テーマは①医薬品の新規物性評価技術に関する研究、②医薬品創製を目指した物性改善および改善戦略に関する研究、③医薬品生産に寄与する分析法・物性評価法の研究、④物性評価技術によるデバイス、非経口投与ルートなどアドヒアランス向上に関する研究、⑤レギュレトリーサイエンスに関する

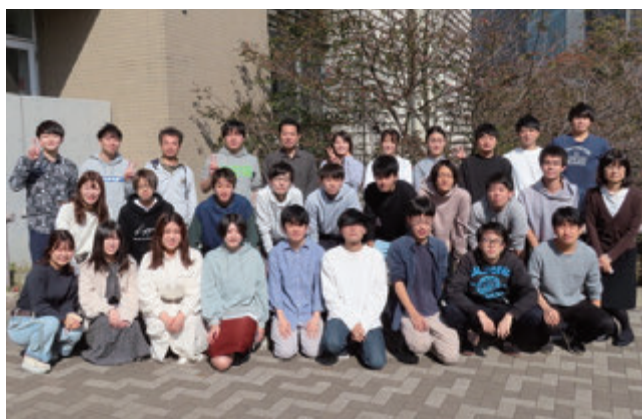
分析・物性研究である。

本研究室には客員教員2名と社会人博士課程の学生3名の5名が所属している。iParkには100以上の企業・組織が参画しており、多様な協働とイノベーション創出が期待される。



中分子化学

中分子化学研究室は、現在、教員2名、博士課程5名、修士課程13名、学部学生9名の総勢29名で構成されています。昨年度は、本メンバーに加えて、日本学術振興会外国人研究者招聘事業により、本研究室の前身である生体機能性分子研究室で学位を取得したMario A. Tan教授（サント・トーマス大学）も参画し、国際共同研究を推進しました。研究トピックスとしては、1960年から続く研究室に蓄積されていた膨大な数の天然物をライブラリーとして整備し、学内共同研究による生物活性評価をスタートしました。OB、OGの皆様が単離、合成した分子が千葉大発の医薬品になるかもしれません。ぜひ、お気軽にお立ち寄りください。



薬化学

卒業生の皆さん、最近の根本研究室内の動向は以下の通りです。

☆2022年4月、柴田晃一さんが技術補佐員として、島田五月さんが事務補佐員として、戴奇彤君が中国からM1として当研究室に加わりました。

☆2022年5月、島里加子さんが技術補佐員として当研究室に加わりました。

☆2022年夏、恒例の研究室旅行は学生のみで楽しみました。

☆2022年8月、学部生が大学院入試に無事合格しました。

☆2022年9月、3年生6名が根本研究室に配属されました。

☆2023年3月、橋本佳典君、古谷典君、山内理靖君が社会に飛び立ちました。池田晃太郎君、松田優君、矢澤智弘君、高橋紀亜君は博士後期過程に進学です。2023年度は総勢30名以上で研究室をスタートします！



薬品合成化学

2023年4月より、山次健三教授（東京大学大学院薬学系研究科より）、荒井秀准教授、笠原彰友助教（東京大学大学院薬学系研究科より）の3名体制となり、新しいスタートを切りました。これまで行なってきました含窒素天然物合成とそれに資する新反応開発に加え、現在の化学技術では未だ難しいタンパク質などの生体高分子を自在に化学変換するための新反応・新手法の開発を行なっていきます。学生7名とともに新しく研究室を作っていく、忙しくも楽しみに溢れた、新たな船出となりそうです。

臨床薬理学

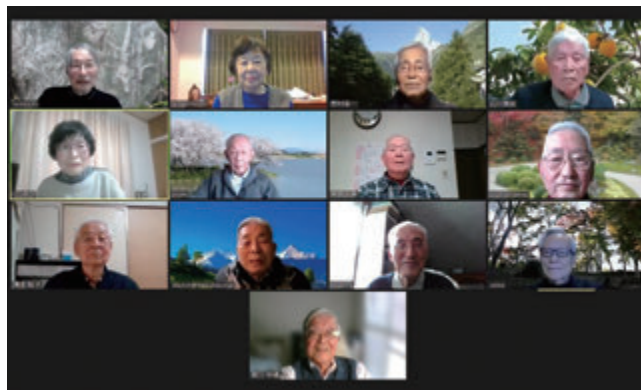
臨床薬理学的研究室は4月から樋坂教授、佐藤講師の専任教員2名体制となりました（畠山先生は薬物学研究室の教授に就任）。令和5年1月現在で学部生12名、大学院生9名、客員研究員2名、客員教授1名（農研機構 竹澤俊明先生）となり、新しいスタートを切っています。臨床試験情報、文献情報の収集およびin vitro/in vivo実験を精力的に行い、機械学習やモデリング解析でも新しい手法をそれぞれ開拓中です。ゼミを対面で再開した一方、ウェブと併用して外部参加希望者にも入ってもらっています。秋には3年生4名がメンバーに加わりました。今年度は爲本・保月の博士学生、荒木・菊池・後藤の3名の6年生が3月に巣立ちます。



1958年卒のクラス45名の卒業写真を載せます。制服規則などなかったがみんな学生服を着ているのは今見ると異様である。5年前60周年記念会は大勢で盛大に開けたが今回有終の美・65周年を招集したところ何とか元気な7名の参加があった。4年生在籍の1957年にはソ連が人工衛星を一番で上げたり A型ウイルスのインフルが内外で大流行し ワクチン急造が要請されたが原料のタマゴが逼迫・急騰した。現在とよく似ている。永年積立て来たクラス積立金を僅かに残ったので薬友会へ寄付させて頂いた。誰かがクラス会をもう一度発案するかちょっとだけ願っている。



昨年9月、中込義雄君が亡くなった。ご冥福をお祈りする。
(中嶋 啓介)



薬友会報の記事を参考に母校の現状を理解、各種企画に出来るだけ協力させて頂く様に努力して参りたいと思います。

(秦 初博)

その間にも新型コロナウイルスによる感染の流行は

2019年以来三年間幹事を務めてくださった真山武志さんはじめ同窓の皆様にお礼申し上げます。
 なお、いままでの同期会費の残余金は千葉大学薬学部に寄付いたしました。(清水 征生)

現在、趣味の俳句、オカリナ、コーラス、ボーリング、フォークダンス、健康麻雀、囲碁等、またコロナ感染症などの病気に関する近況をチャットしています。もう畏まった食事会のようなクラス会は不要なような気がします。勿論「峠の会」に協力的なメンバーでLINEを活用できない方々には手紙等でLINEグループの近況をお知らせするのが望ましいと思います
が・・・。

(平野 武明)

『便りのなきは良き便り』と思わないで、近況などお知らせ頂ければ幸いです。(深草 佑一)

今年の賀状便りも体力・気力の低下を嘆くものが多くなりました。開き直って自由な時間が一杯ある、世

クラスの皆様お互いに頑張って壁を乗り越えましょ
う。(齊藤 弘)

(堀江 透)



– 14 –

(戸井田敏彦)

(安東賢太郎)



学部だより

教員の人事異動 (R4.4.2～ R5.4.1)

◎採用者

R 4 . 5 . 1	CHEN ZIQIAO	製剤工学	特任研究員
R 4 .10. 1	宇津 美秋	薬効薬理学	助教 (農研機構 研究員より)
R 5 . 1 . 1	杉山 龍介	遺伝子資源応用	助教 (ヒューマン・フロンティア・サイエンス・プログラム HFSPフェローより)
R 5 . 4 . 1	山次 健三	薬品合成化学	教授 (東京大学 助教より)
R 5 . 4 . 1	永島 一輝	実務薬学	助教 (帝京大学 助教より)
R 5 . 4 . 1	爲本 雄太	薬物学	特任助教
R 5 . 4 . 1	山崎 綾子	薬効薬理学	特任助教
R 5 . 4 . 1	笠原 彰友	薬品合成化学	特任助教
R 5 . 4 . 1	中島 誠也	薬化学	特任研究員 (千葉大学 助教より)
R 5 . 4 . 1	橋本 卓也	国際高等研究基幹	特任教授 (理化学研究所 主任研究員)
R 5 . 4 . 1	栗原 崇人	国際高等研究基幹	特任助教

◎定年退職

R 5 . 3 .31	石橋 正己	活性構造化学	教授
-------------	-------	--------	----

◎辞職

R 4 . 9 .30	CHEN ZIQIAO	製剤工学	特任研究員
R 5 . 3 .31	小林 江梨子	社会薬学	准教授 (城西国際大学薬学部 教授へ)
R 5 . 3 .31	原 康雅	活性構造化学	助教 (香川大学農学部 助教へ)
R 5 . 3 .31	田中 浩揮	薬物学	助教 (東北大学大学院薬学研究科 助教へ)
R 5 . 3 .31	中島 誠也	薬化学	助教 (東京大学大学院薬学系研究科 特任准教授へ)
R 5 . 3 .31	塩見 慎也	国際創薬学	特任助教 (徳島文理大学薬学部 助教へ)

◎昇任

R 4 .10. 1	殿城 亜矢子	生化学	准教授 (生化学 講師より)
R 5 . 4 . 1	原田 真至	国際高等研究基幹	准教授 (薬品合成化学 助教より)

◎配置換

R 5 . 4 . 1	内海 尊雄	実務薬学	助教 (附属病院薬剤部 薬剤師より)
R 5 . 4 . 1	内田 雅士	医療薬学	助教 (附属病院薬剤部 薬剤主任へ)

◎所属換

R 5 . 4 . 1	石川 雅之	医療薬学	助教 (実務薬学 助教より)
R 5 . 4 . 1	高屋 明子	感染制御学	准教授 (活性構造化学 准教授より)

第108回 薬剤師国家試験合格状況

令和 5 年 2 月18日、19日

新卒者合格率 94.87% (受験者39名、合格者37名)

本学科目等履修生合格率 50% (受験者 2 名、合格者 1 名)

2022年度 卒業生・修了生の進路

学部 4 年生 37名

進 学：千葉大学大学院医学薬学府修士課程、東北大学大学院薬学研究科博士課程前期課程
京都大学大学院医学研究科

学部 6 年生 40名

企 業：日本調剤(株)、(株)アインホールディングス、中外製薬(株)、アステラス製薬(株)、総合メディカル(株)、
エーザイ(株)、住友ファーマ(株)、(株)シノテスト、(株)サンドラッグ、第一三共(株)、小野薬品工業(株)、
持田製薬(株)、協和キリン(株)、(株)タカサ

病 院：千葉大学医学部附属病院、東京都立多摩総合医療センター、板橋中央病院、埼玉県済生会川口総合病院

公務員：厚生労働省、福岡県警察科学捜査研究所、会計検査院

その他：医薬品医療機器総合機構

修士課程 43名

進 学：千葉大学大学院医学薬学府博士課程、北海道大学大学院生命科学博士課程、
千葉大学薬学部科目等履修生

企 業：バーチャレクス・コンサルティング(株)、住商ファーマインターナショナル(株)、
第一三共ケミカルファーマ、亀田製薬(株)、日本メジフィックス(株)、エイツーヘルスケア(株)、
ファイザー(株)、富士フィルムソフトウエア(株)、住友化学(株)、キリンホールディングス(株)、大正製薬(株)、
東ソー(株)、アステラス製薬(株)、持田製薬(株)、科研製薬(株)、旭化成ファーマ(株)、テクノプロ・R&D社、
リケンテクノス(株)、IQVIAサービスジャパン、塩野義製薬(株)、中外製薬(株)、北興化学工業(株)、
丸善石油化学(株)、新日本科学PPD、イービーエス(株)

博士課程 22名

企 業：CYTENA、武田薬品工業(株)、大原薬品工業(株)、TDSE(株)、中外製薬(株)、日本たばこ産業(株)、サラヤ(株)、
田辺三菱製薬(株)、(株)ツムラ、バイエル薬品(株)、塩野義製薬(株)

その他：Jashore University of Science and Technology、Silpakorn University Faculty of Pharmacy、
チュラコーン大学、帝京大学、独立行政法人労働者健康安全機構労働安全衛生総合研究所、
千葉大学医学部附属病院

2023年度 薬学部入学者の状況

入学者93名（男43名、女50名：推薦10名、前期73名、後期10名、私費0名）

出身高校一覧

札幌北（北海道）、札幌南（北海道）、盛岡第一（岩手）、安積（福島）、佐原（千葉）、県立千葉（千葉）、
千葉東（千葉）、東葛飾（千葉）、県立船橋（千葉）、船橋東（千葉）、青山（東京）、麻布（東京）、開成（東京）、
錦城（東京）、国立（東京）、光塩女子学院高等科（東京）、頌栄女子学院（東京）、新宿（東京）、成城（東京）、
青稜（東京）、創価高等学校（東京）、立川（東京）、筑波大学附属（東京）、東京学芸大学附属（東京）、
東京成徳大学（東京）、西（東京）、白鷗（東京）、広尾学園（東京）、文京（東京）、私立武蔵（東京）、
目白研心（東京）、早稲田（東京）、県立浦和（埼玉）、浦和明の星女子（埼玉）、大宮（埼玉）、
開智中学高等学校（埼玉）、県立川越（埼玉）、越谷北（埼玉）、神奈川大学附属（神奈川）、鎌倉学園（神奈川）、
相模原（神奈川）、横浜市立南高等学校（神奈川）、清真学園（茨城）、土浦第一（茨城）、茗溪学園（茨城）、
中央中等教育学校（群馬）、磐田南（静岡）、県立静岡（静岡）、静岡東（静岡）、榛原（静岡）、浜松市立（静岡）、
県立長野（長野）、岡崎（愛知）、膳所（滋賀）、広島中等教育学校（広島）、宮崎大宮（宮崎）、鶴丸（鹿児島）、
屋久島あおぞら（鹿児島）

（掲載について承諾を頂いた方の出身校名のみ掲載しております。）

2023年度 大学院医学薬学府入学者の状況（4月入学者）

修士（薬学領域）入学 46名：総合薬品科学専攻46名

博士（薬学領域）入学 11名：先端医学薬学専攻（4年制） 3名
先端創薬科学専攻（3年制） 8名

2022 年 の 受 賞 記 録

【教員の受賞】

令和4年3月	佐藤 洋美	臨床薬理学	令和3年度薬理系薬学部会奨励賞（日本薬学会）
令和4年3月	鈴木 博元	分子画像薬品学	奨励賞（日本薬学会物理系薬学部会）
令和4年5月	石川 雅之	実務薬学	第38回日本TDM学会・学術大会優秀演題賞（日本TDM学会）
令和4年5月	植田 圭祐	製剤工学	2022年度日本薬剤学会奨励賞（日本薬剤学会）
令和4年6月	中村 浩之	薬効薬理学	第15回臨床薬理研究振興財団研究大賞（臨床薬理研究振興財団）
令和4年7月	塩見 慎也	中分子化学	天然物化学談話会奨励賞（天然物化学談話会）
令和4年9月	鈴木 紀行	予防薬学	日本微量元素学会 研究学術賞
令和4年9月	原 康雅	活性構造化学	日本生薬学会第68年会（松山）優秀発表賞

【学生の受賞】

令和4年1月	貝塚 祐太、市橋 莉大	分子画像薬品学	優秀賞（令和3年度学生ビジネスプランコンテスト （主宰団体名：一般財団法人 学生サポートセンター））
令和4年2月	貝塚 祐太、市橋 莉大	分子画像薬品学	最優秀賞（第1回なのはなコンペ（アドバンスコース）2021）
令和4年3月	貝塚 祐太、市橋 莉大	分子画像薬品学	大賞（ちばぎん・はまぎん学生ビジコン2021）
令和4年3月	風岡 顯良	生物薬剤学	日本薬学会第142年会 優秀発表賞
令和4年3月	藤戸 貴之	製剤工学	日本薬学会第142年会 優秀発表賞
令和4年3月	松永 美咲	予防薬学	日本薬学会第142年会 優秀発表賞
令和4年3月	坂元寿輝弥	中分子化学	日本薬学会第142年会 優秀発表賞
令和4年3月	松岡 優輝	活性構造化学	日本薬学会第142年会 優秀発表賞
令和4年3月	高橋 紀重	薬化学	日本薬学会第142年会 優秀発表賞
令和4年5月	江寺 理紗	製剤工学	第37年会最優秀発表賞及び永井財団学部学生七つ星薬師奨励賞 （日本薬剤学会）
令和4年6月	岩崎 光希	薬物学	優秀発表賞、第38回日本DDS学会学術集会
令和4年7月	高田 翔平	予防薬学	プラズマ分光分析研究会 若手奨励賞
令和4年7月	高田 翔平	予防薬学	The 8th International Symposium on Metallomics Impressive Research Award
令和4年8月	堀合 咲慧	予防薬学	フォーラム2022 衛生薬学・環境トキシコロジー 実行委員長賞
令和4年9月	江寺 理紗	製剤工学	第47年会製剤・創剤セミナー Best Poster Presentation Award （日本薬剤学会）
令和4年9月	今井 萌乃	生化学	第28回 小型魚類研究会優秀ポスター発表賞
令和4年9月	王林 思帆	生化学	第66回日本薬学会関東支部大会優秀口頭発表賞
令和4年9月	山下 紗葵	分子画像薬品学	優秀発表賞（第19回次世代を担う若手のためのフィジカル・ファーマフォーラム）
令和4年9月	馬目 照久	活性構造化学	日本生薬学会第68年会（松山）優秀発表賞
令和4年9月	山本 麻由	薬物学	第27回創剤フォーラム若手研究会優秀発表賞
令和4年10月	仲村 美咲	製剤工学	第66回日本薬学会関東支部会優秀発表賞
令和4年10月	岩瀬真喜子	予防薬学	日本毒性学会生体金属部会 若手優秀研究賞
令和4年11月	牧 愛優美	生化学	第8回ゼブラフィッシュ・メダカ創薬研究会優秀口頭発表賞
令和4年11月	坂元寿輝弥	中分子化学	第64回天然有機化合物討論会奨励賞
令和4年11月	柴田 侑裕	臨床薬理学	DMPK賞 1st place（日本薬物動態学会 年間最優秀論文賞）
令和4年11月	渡邊 一樹	薬品物理化学	クロススケール新生物学第1回若手の会優秀発表賞
令和4年11月	小林 航	薬品物理化学	クロススケール新生物学第1回若手の会優秀発表賞
令和4年12月	市川 眞帆	生物薬剤学	第5回 医薬品毒性機序研究会若手優秀発表賞
令和4年12月	栗原 崇人	薬化学	第121回有機合成シンポジウム優秀ポスター賞
令和4年12月	千田 克幸	薬物学	大学院教育改革フォーラム2022優秀発表賞

成績優秀賞・論文優秀発表者賞

学長表彰

栗原 崇人（博士課程） 馬目 照久（修士課程） 原 脩祐

学部長表彰

植木 理奈（薬科学科4年生）

原 脩祐（薬学科6年生）

薬学科卒業論文発表会 優秀発表賞

大谷 あさ 野溝 航太 荒木 渉吾 王林 思帆

修士論文優秀発表賞

西岡秀奈美 市川 眞帆 田内理紗子 石倉 晨規

学府長表彰

栗原 崇人（博士課程） 馬目 照久（修士課程）



修士論文優秀発表者

薬友会より

ご寄付いただいた皆様

令和4年度も薬友会の活動にご賛同いただき、多くの皆様からご支援をいただきました。皆様のご協力に深く感謝を申し上げますとともに、ここに寄付をいただいた方々のお名前を掲載させていただきます。

(五十音順、敬称略)

安 食 親 孝	石 井 靖 男	石 橋 恵美子	伊 藤 圭 一
伊 藤 直 子	岩 崎 吉 宏	許 奎 璋	久 野 美和子
小 池 猛	昭和33年卒クラス会一同 (代表 石井靖男)		仲 川 明 子
西 原 尚 史	根 矢 三 郎	野 口 雅 利	野 原 智恵子
羽 下 豊 和	松 本 あき子	毛 利 哲 郎	山 川 雅 延
吉 川 勝	吉 木 康 雄	余 田 佳 子	

脇 野 春 子 ※ (故人 送金は甥御様の脇野真司様より)

(お名前の公表を希望されていない方につきましては、掲載していません。)

今後も、皆様方の温かいご支援を何卒よろしくお願いいたします。

<ご寄付のお願い>

薬友会のさらなる活性化のため、ご寄付をお願い申し上げます。

一口2千円から随時受け付けています。同封の振込用紙に、①氏名、②住所、③卒業年度をご記入ください。

■郵便局より振込の場合

振替口座 00150-5-551796 千葉大学薬友会

■他金融機関より振込の場合

銀 行 名：ゆうちょ銀行 店 名：〇一九 (ゼロイチキュー店)

店 番：019

預金種目：当座 口座番号：0551796

口 座 名：千葉大学薬友会

※千葉大学薬学部へのご寄付は、千葉大学基金から受け付けています。

個人からのご寄付の場合、寄付金が2,000円を超える場合は、税制上の優遇措置を受けることができます。インターネットからお申込みいただく場合、「寄付目的」の項目に「個別プロジェクトへの支援」、「支援先」の項目に「薬学部」とそれぞれ選択することで、ご寄付が可能です。千葉大学基金からの寄付に関する詳細は、「千葉大学基金」でご検索・ご確認下さい。ご不明な点は、TEL：043-290-2014、Email: kikin@office.chiba-u.jp にお問い合わせ下さい。とくに銀行振込をご希望の場合、お問い合わせののち送付される銀行振込用紙を用いて指定の口座へお振込ください。

<薬友会ホームページ>

薬友会ホームページ (<https://yakuyukai.net>) には、同窓会開催のお知らせや薬友会情報などを掲載しております。情報掲載のご希望は、下記の薬友会事務局までご連絡ください。

ホームページから会員情報変更が可能です。<https://ours1.net/yakuyukai> (下記QRコード) にアクセスして頂くか、または薬友会ホームページの「住所変更」から、下記のIDおよびパスワードを入力してお入りください。従来通り、同封のハガキおよびEメールによるご連絡も可能です。

ID：●●●●●●●● パスワード：●●●●●●●●

薬友会事務局連絡先 【Eメール】 yakuyukai@chiba-u.jp 【F A X】 043-226-2930



変更連絡フォーム

<令和5年度各種委員会名簿>

(○印：委員長)

総務委員会 ○伊藤 晃成、青木 重樹、竹村 晃典、村上 泰興 (S36)、佐藤 信範 (前委員長：アドバイザー)

財務委員会 ○高野 博之、関根 祐子、山口 憲孝、永島 一輝、内海 尊雄、村上 泰興 (S36)、
森部 久仁一 (前委員長：アドバイザー)

名簿委員会 ○山崎 真巳、吉本 尚子、村上 泰興 (S36)、根本 哲宏 (前委員長：アドバイザー)

事業委員会 ○上原 知也、鈴木 博元、甘中 健登、鈴木 弘行、樋坂 章博 (卒後教育研修担当)、
高屋 明子 (前委員：アドバイザー)

広報委員会 ○根本 哲宏、原田 慎吾、小椋 康光 (前委員長：アドバイザー)

第31回千葉大学大学院薬学研究院 薬友会生涯教育セミナー・宮木高明記念講演会開催のお知らせ

日 時：2023年7月8日（土） 14：00～17：00

場 所：千葉大学薬学部120周年記念講堂（医薬系総合研究棟Ⅱ 1階）

（〒260-8675 千葉市中央区亥鼻1-8-1）

（※）対面開催を予定

主 催：千葉大学大学院薬学研究院・千葉大学薬友会

テ ー マ：「基礎から創薬へ」

生涯教育セミナー

1) 「天然物に学ぶケミカルバイオロジー研究」

荒井 緑 先生（慶應義塾大学 理工学部 生命情報学科 教授）

2) 「光免疫療法の基礎と今後の展望」

花岡 宏史 先生（関西医科大学附属光免疫医学研究所 教授）

3) 「ヒト生体模倣血液脳関門モデルの開発：中枢神経系疾患創薬への応用を目指して」

降幡 知巳 先生（東京薬科大学 薬学部 教授）

宮木高明記念講演会

「放射線が拓く新たな診断・治療」

小野 正博 先生（京都大学 大学院薬学研究科 教授）

セミナー参加費 無料

お問い合わせ先 薬学研究院 分子画像薬品学研究室 上原知也
（電話/FAX：043-226-2896 email: tuehara@chiba-u.jp）

薬剤師卒後教育研究講座開催のお知らせ

本講座は薬剤師の生涯教育を目的とする勉強会です。また、在学生を含めてどなたでも参加できます。千葉大学大学院薬学研究院・薬友会・医学部附属病院薬剤部・千葉県病院薬剤師会が共催します。令和5年度の開催計画は次の通りです。

●第121回 2023年9月10日（日）13-16時 オンライン開催。

内容：アカデミック・ディテリング、ファーマコキネティクス、薬物相互作用、薬-薬連携、病棟薬剤師の役割など。

講師：石井伊都子（千葉大学医学部附属病院 薬剤部）、

小茂田昌代（日本アカデミック・ディテリング研究会、医療法人徳洲会
千葉西総合病院薬剤部、東京理科大学薬学部）、

樋坂 章博（千葉大院薬 臨床薬理学）

参加費2000円・学生無料、事前予約制となります。

日病薬病院薬学認定薬剤師認定シール0.5単位/1コマ×3または日本薬剤師研修センター研修認定薬剤師2単位（日病薬または日本薬剤師研修センターのどちらか一方を取得可能）を、それぞれ申請中です。

詳細は薬友会と臨床薬理学研究室（旧：高齢者薬剤学）のホームページに掲載します。また、臨床薬理学研究室のホームページ<http://www.p.chiba-u.jp/lab/cpp/seminar.html>ではこれまでの活動をご覧いただけます。

ご不明な点は臨床薬理学 佐藤洋美（TEL：043-226-2879）までお問い合わせ下さい。

編集後記

薬友会報の編集を無事に終えることができ、お力添えをいただいた方々に感謝申し上げます。長かったコロナ禍のトンネルも何となく出口が見え始め、2019年度以来の日常が戻りそうな予感を感じさせる春を迎えています。亥鼻キャンパスは医学部の新棟に続いて、災害治療学研究所の建設が進んでおり、薬化学教授室から見える風景もここ数年の間に大きく様変わりしました。薬友会会員の皆様におかれましては、千葉大学薬学部にお立ち寄りいただき、年々進化する亥鼻キャンパスをご覧いただければと思います。

広報委員会 会報担当部門 根本哲宏（委員長）、原田慎吾、小椋康光（前委員長）